

聖書日課 『からし種』 2025.3.9-3.16

| | |
|-------------------------------------|---|
| <p>3月9日 (日) マタイ 25章</p> | <p>「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう」(21、23節)。5と2タラントン「預け」られた僕への主人の労いの言葉。よく読むと最後の言葉は「管理させよう」であり「あげよう」ではない。タラントンはどこまでも「主人の財産」。私たちは僕として「管理する者」にすぎない。ふさわしい「忠実さ」を祈り求めていきたい。</p> |
| <p>10日 (月) マタイ 26章</p> | <p>「立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た」(46節)。弟子たちに「死ぬばかりに悲しい」と苦悩に満ちた心情を吐露し弱々しく焦燥しきっていた主イエスが、「立て、行こう」と、剣と棒を手にした群衆に自分から向かわれる。主イエスの心の向きを百八十度変えた祈りの「すごみと深さ」を示される。切なく苦しい時こそ神に心を向け、神の取り扱いを受けよう。</p> |
| <p>11日 (火) マタイ 27章</p> | <p>「(ユダは)『わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました』と言った。しかし彼らは、『我々の知ったことではない。お前の問題だ』と言った」(4節)。ユダの最大の悲劇は罪告白する相手を誤ったことだと思う。人は自らの罪の責任を取れないし、他人の罪の責任など取れるわけがない。そんな卑怯で救いがたい私たちの罪を背負うため主は来てくださった。</p> |
| <p>12日 (水) マタイ 28章</p> | <p>「すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した」(9節)。婦人たちが弟子たちに語るべき言葉はすでに主の天使が伝えていたのに、「わざわざ」主イエスは彼女たちに復活のご自身をあらわされた。十字架で心引き裂かれ悲しみを味わい尽くした彼女たちへの深い愛を込めて。</p> |

大井バプテスト教会

聖書日課 『からし種』 2025.3.9-3.16

| | |
|--------------------------------------|--|
| <p>13日 (木)</p> <p>マルコ 1章</p> | <p>「それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した」(12節)。ヨハネから「悔い改めのバプテスマ」を受けた主イエスに天から注がれた“霊”が、主イエスを荒れ野に送り出す。マルコはこの聖霊こそが主イエスを四十日間荒れ野にとどめ、サタンの誘惑に立ち向かう力を与えたことを示す。今日わたしもまた、まず天からの“霊”の導きを求めて一日の働きを始めたい。</p> |
| <p>14日 (金)</p> <p>マルコ 2章</p> | <p>「イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って…」(8節)。主イエスには霊の力により人々の心の中の考えがすべてお見通しだった。とすれば、弟子たちが日々心の中でつぶやく不満や不信も不安も、信仰のいい加減さや未熟さもすべて最初からお見通しの上で、彼らの信仰のために祈り続け共に歩んでくださったのだと知る。</p> |
| <p>15日 (土)</p> <p>マルコ 3章</p> | <p>「そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、『手を伸ばしなさい』と言われた」(5節)。主イエスは人々の「かたくなな心」に毎日どれほど落胆し、悲しみ、怒りを抱かれたことか。にも関わらず主イエスの言葉と行動には神の深い愛がにじみ出ている。主イエスの中で聖霊の働きはひと時たりとも休むことがなかったのだろう。</p> |
| <p>16日 (日)</p> <p>マルコ 4章</p> | <p>「夜屋、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない」(27節)。種が芽を出して成長することは知っている。「どのように」そうなるのかもかなり解明されている。しかし「どうして」？誰がそれを望むのか？ある人は初めて「創世記」を読んだ感動を「私はなぜ世界が造られたのかも知らずに今まで生きてきた」と語った。</p> |